

以上とりとめもなく、当時の模様を記してきましたが、中学一年から大学一年までの卓球生活の中で、三年間を過ぎた西高卓球部時代がもっとも懐しく思われ、同期の方々、あるいは先輩、後輩の方々と又OB会でお会いできる日を楽しみにしております。



▲昭和35年春 卓球部ハイキング（於多摩湖）

卓球と私

十五期生 遠藤 孝子

四十九年春、アジア選手権が横浜で行なわれた時のことである。私の住む町田市の市長が横浜市長と懇意であるということから、大会名誉役員をひきうけられ、その上、当地で中国選手団を招いて大会を行なう計画を進めていた。日中一流選手の友好試合、中国選手同志の模範試合ばかりでなく、地元選手との交流試合も出来るかもしれないと聞いて、胸をときめかせた。それというのも、ちょうどこの話がもち上がる一年ほど前から町田市の大会で一応の成績を納めていたので、出場機会があるかもしれないという期待と不安があったからだ。中国選手と一戦交えることなど、学生時代にさえない夢にも思わなかったことである。この歳になって私などが出るよりも若い人を……という気持ちと、やってみたいという気持ちの入り交じりであった。ともかく男女各六名の地元メンバーに選ばれ、そして当日、大会期間中にも拘わらず、萩恩庭、李富榮、余錦佳選手ら総々たるメンバーが来られたのである。

私は、幸運にもスカンジナビア選手権で優勝したばかりの余錦佳選手と一セットだけのゲームをやらせていただいた。

十四本で負けた。その時は、ボールもよく見ていたし、決して学生時代のように、夢中で何をやっていたかわからなかったわけではなかった。しかし、たった一度のチャンスなのだということを、もっともっと自覚していれば、もう少し内容のある試合ができたかもしれないのに、もう一セットやれたらもう少し何とかなったのに……というのが実感であった。

卓球が非常にメンタルな要素を持つスポーツだとわかっていたつもりであったが、恥ずかしいことに、早大を卒業して小さな大会に出るようになってはじめて、試合中に相手の作戦、心理状態など多少わかるようになってきて、今までのただ懸命にやるのとは違って、卓球がまた魅力あるものになってきた時だったのである。

あれから二年、集中力のなさから負けたりすると、もう試合に出るのはやめようと思う反面、くやしさと後悔が尾をひいて、ラケットを捨てきれずにいる。

この歳になって又卓球を始めたのも、運動不足の解消が当初の目的であった。やり出して、団地の中だけでなく、様々な方と知りあいになれたし、早大時代の私を知っている方などにもお会いできたし、卓球をやっていて本当によかったと思うことがしばしばあった。

また、試合の日も練習の日も、頑張っってねと黄色い声援を

送ってくれる子供たちも「お母さんが卓球上手だから育子ちゃん(長女六才)もドッチボールうまいのね」と友だちから言われた一言が、思わぬ自信になったことを知らされたりもした。

週に一回も練習できずに、どれだけ進歩するか疑いつつも、多少の可能性を信じて出来るのもこんな面があるからだろう。たとえそれを否定するようなことがあっても、幸か不幸か、町田市には体育指導員制度が普及していて、私もその一員として、時々地域の卓球愛好者、ママさんチームなどに呼ばれて、卓球の楽しさをもっと教えなければならぬのである。

中学時代から卓球を続けながら、多少の勉強もしたつもりなのに、皮肉にも、大学を出て役に立っているのは、どうやら卓球だけの昨今である。ちなみに、現在六才と四才の子を持つ専業主婦である。

